慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダンカン・ バイゼル著 手織工 : 産業革命期におけるイングランド綿工業の一研究
Sub Title	Duncan Bythell, The handloom weavers, a study in the English cotton industry during the industrial revolution, 1969
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.4 (1970. 4) ,p.348(70)- 351(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19700401-0070
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700401-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

ダンカン・バイゼル著

『手　織　工——産業革命期における イングランド綿工業の一研究』

(Duncan Bythell, The Handloom Weavers, A Study in the English Cotton Industry during the Industrial Revolution, with an Introduction by R. M. Hartwell, Cambridge University Press, 1969)

「われわれが知ることを望んでいるあらゆるものを，われわれに明らかにしてくれるという種類の史料，手記あるいは文書は存在しない。勝ち目のない勝負を挑むグループのように，手織工たちとその問題は，彼らが，社会的経済的構造のなかにその姿を没するやいなや，ほとんど忘れられた悪夢となったのである」(本書，20～21 頁より)。

(1)

綿紡績業を基軸として歴史的な展開をみたイギリス産業革命は，たんにイギリスのみならずヨーロッパにおける産業資本主義の確立の決定的な局面であり，ひろく近代市民社会の形成史の上で見逃すことのできないいわゆる「二重革命」[1]の重要な内容をなす。それゆえにヨーロッパにおいてもまたわが国においてもその研究は，1世紀半になんなんとする時間的へだたりにもかかわらず，いまなお跡を絶つことなくつづけられ，その真相が究明され，そしてその本質の追求はやむことがない[2]。しかしただ「産業革命」といったところで，それによって何を意味するかは必ずしも明らかでないばかりか，その内容をめぐって論争があることはよく知られている。トインビー＝P・マントウおよびハモンドの悲観論に対するクラッファム＝アシュトレの楽観論についてふれることはここではさし控えなければならないが，ともかく産業革命史を彩るもっとも興味ある問題のひとつが，その渦中に身をおき，未曽有の経済的・社会的大変動のなかで異常な体験をしなければならなかった労働者階級の運命であり，とくにいちじるしい経済的貧困と社会的地位の没落を味わわなければならなかった手織工の状態であることは，従来，産業革命史にかんするほとんどすべての研究者の指摘するところであった。とりわけトインビー，ポール・マントウあるいはハモンド夫妻の悲観学説は，こうした手織工の没落を，この社会的・経済的変動の重要な特徴として把握することによって構成されたものであったことはすでに定説となっている。ところが，産業革命史における手織工の地位のこのような比類のない重

注(1)「二重革命」とは，E. J. ホッブスバウムが使った言葉である。彼はその大著「革命の時代」(The Age of Revolution: Europe 1789-1848 by E. J. Hobsbawm, London, 1962, 安川悦子・水田洋訳「市民革命と産業革命——二重革命の時代——，岩波書店，1968年) の「まえがき」において，「本書は，1789年と1847年の間の世界の変化を，ここで「二重革命」と呼ばれるもの——1789年のフランス革命と同時代の（イギリスの）産業革命——の帰結である限りにおいて，あとづける」と云い，さらに象徴的に，「二重革命の歴史は，新しいブルジョア社会の勝利の歴史であっただけではない。それはまた，1848年から1世紀のうちに拡張を縮小に転換させてしまうことになる諸勢力の，出現の歴史でもある」とのべているのはまことに鮮烈な印象を与える。

(2) わが国における産業革命史研究の水準を示すものとしては，高橋幸八郎編「産業革命の研究」(岩波書店，1967年) がある。その序論，岡田与好「産業革命論の変遷」および吉岡昭彦「イギリス産業革命と賃労働」は，内容が包括的であるのみならず，労働問題研究の視角にとっても重要な問題を提起しており，有益である。なお，本書は，遠藤輝明および北条功両氏のフランスおよびドイツの産業革命にかんする論稿も含み，本書に異彩をそえているが，これと対照的なものとして，河野健二，飯沼二郎「世界資本主義の形成」(岩波書店，1967年) がある。網羅的ではあるが，理論的に不整備の感がある。前者が大塚史学をもって理論的支柱とする強固な礎石の上に築かれている感があるのに対し，後者は多分によせ集めの感をまぬがれることができない。

またイギリスにおける最近の研究としては，寡聞な筆者の知る限り，Raymond Challinor and Brian Ripley, The Miners' Association——A Trade Union in the Age of the Chartists, London (Lawrence and Wishart) 1968 および E. J. Hobsbawm and George Rudé, Captain Swing, London, (Lawrence and Wishart) 1969 がある。なおリプリント版ではあるが，Ivy Pinchbeck, Women Workers and the Industrial Revolution, 1750—1850, London and Edinburgh 1969 および Frank Peel, The Risings of the Luddites, Chartists and Plug-drawers, London (Frank Cass and Co. Ltd), 1968 もまた忘れられてはならないであろう。

要性にもかかわらず，その階層としての存在形態，あるいは躍進する生産力の発展のなかでしめる地位，労働力構成の問題，賃金形態などの，実在としての手織工の生活諸条件の経済学的な分析はむしろ等閑視され，社会的地位の低下とそれに伴う貧困の状態が，きわめて詠嘆的な表現で描写される傾向が強く，とくにその代表的なものとしては，ハモンド夫妻の諸研究にみられるところであろう。また厖大な史料を駆使して周到綿密な分析を行ったマントウの研究も，手織工の分析については必ずしも充分とはいえない。そのような意味でここにとりあげたバイゼルの研究は，従来の産業革命史研究に新たな問題を提起し，研究の深化に貢献しようとする意欲に溢れた労作ということができるであろう。

(2)

著者は「手織工」という書物のなかで，何を明らかにしようとするのであろうか。まず目次をみると，つぎの 11 章から成っている。

1) 問題および出所
2) 産業の組織
3) 労働力
4) 力織機の出現
5) 賃金，(i)出来高払い
6) 賃金，(ii)収入および生活水準
7) 世論と手織工
8) 綿織工 (cotton hand-loom weavers) の間における組織的な産業行動
9) 織工と急進的政治
10) 貧困の問題
11) 転換と消滅

一見して明らかなように，手織工の産業革命期における絶望的抵抗を問題にするというよりは——そのような観点が従来は普遍的であった——綿工業におけるその労働力としての地位，賃金および生活条件の分析を中心として，その上で手織工の組織的運動や政治とのかかわり合いを問題にしているところに，従来の研究書にはみられない論理性と実証性の結合をみることができる。

産業革命期における手織工についてのもっとも大きな論点のひとつは，1760年代から1830年代に至る綿工業の機械化の過程において，労働力としての手織工の給源は一体何であったかということである。この問題について著者は，Redford, Ashton, Halévy, Mantoux および Clapham らの見解を比較検討しつつ，問題の提起を行っている。

すなわち，Redford の見解によれば，1830年代になってもなお，イングランドおよびスコットランドにおいては，60,000 台の力織機があったのにたいし，240,000 台の手織機が存在したといわれる。1785年 Edmund Cartwright が，最初に特許をとったにもかかわらず，このように力織機の適用が遅れた理由について，Ashton は，その "Industrial Revolution" において，つぎのような理由をあげている。① hand から power への推移の緩慢さは，一部は power-loom それ自体の欠陥によるものであること，つぎに②フランスとの長い戦争によって利子率がたかまり，それが工場にたいする投資意欲を削減したというのである。そしてさらに，③織工が主として婦人であったが，その家庭を離れることを嫌ったことによるというのである。これに対して，Halévy やその同国人 Mantoux は，hand-loom weaver の機械への抵抗をおそれ，そのために機械化がおくれたという見解である。著者はこれにたいし，第1のテーゼは一般にうけいれられており，power-loom の欠陥とはこの場合，不良品を出さないための自動装置の欠如を意味したのであった。ところが，これに反して Ashton のテーゼの第2は一般に支持されていない。1810年代の戦時においても，綿業では設備投資が盛んで，発展していたとするのである (pp.6-7)。

power-loom の採用の問題は，手織機の減少ということになり，産業革命期における cotton hand-weaving に雇用された「労働力」の性格および構造および配分の問題とならざるをえない。著者はここで，労働力構造についてつぎのように諸家を批判する。一般に紡績機械が発明される 1770 年以前には，純綿 (all-cotton) の布を生産する織工というものはいなかったし，たて糸 (warp) およびよこ糸 (weft) という綿糸 (cotton yarn) の生産を可能にしたものは，リンネルと綿の混合製品をつくっていたランカシアのファスチャン織工がそれにもっとも近いものであった。彼らが綿工業の労働力部分の中核となったのは明らかであるが，しかしそれだけではあまりにも少なすぎる。John Clapham は，1830年代の綿業労働者の大部分が婦人 (women and girls) であったと規定したのにたいし，著者はこれを疑問とし，家族の従属的なメンバー (subordinate member of family) といわれた多くの婦人，子供あるいは老

人にとって，hand-loom weaving は full-time trade ではなく，紡績が，かつてそうであったように domestic by-occupation であった。だとすれば，そのようなものとして労働力を把握することには問題があり，機織が唯一の収入の源泉である成人が労働力構成の上でどのような地位をしめていたかということである。一方，アイルランドからの移民の役割を強調する Redford の見解にも批判的である。

以上にみたように，著者によれば，労働力について知られていることが少いと同様に，賃金について知られていることもまた少ない。著者は 1830～40 年の賃金について実証的な研究を残した G. H. Wood の如きも完全な推測であるとしている。きわめて大胆な問題提起である。すなわち綿業においては，賃金は同一性よりはむしろ賃金格差の方が一般的であり，同じ町の，同じ布地の場合でも，異なれる製造業者によって出される出来高率は，10～15パーセントほどのちがいがあったといわれる。同一の布地については，出来高率の差異があるのとは別に，①賃金というものは，地方によって異なり，町の織工は，労働力がより豊富な田舎よりも高いのが普通である。②賃金というものは，仕事の質，すなわち，その織物の質が，fine, fancy, patterned cloth のいずれであるかによって異なる。しかし，③現実の週賃金が基本的に労働者の熟練に多く依存する。

以上のように，著者は，労働力の量と質の問題についてきわめて高い関心を示しているが，これとの関連において，議会報告書 (parliamentary papers) を絶対視することに疑問を抱き，とくに証人となる人々がともすれば同一人物の度々の登場となってあらわれるところから，産業革命史研究にとって，その価値を相対化していることは，(pp. 18-19) きわめて印象的であろう。このような問題提起を中心として，以下に著者の見解が提示されており，簡単に考察することにしよう。

（3）

毛織物業と異なって歴史の浅い，いわば新興の産業としての綿工業が，18 世紀の最後の 30 年間に，王国の他のいずれの産業よりも多くの雇用と輸出を実現し，1830 年代には，イギリスの輸出価格の半分を占めたといわれるが (p. 25)，その労働力はどこから供給されたのであろうか。"cotton hand-loom weaving industry" は，その製造過程が，労働者自身の家もしくは仕事場で行われる "outwork or domestic industry" であり，真の "domestic industry" と近代的な "power-driven weaving shed" の中間的形態としての hand-loom weaving shed である点において，shed (仕事部屋) は，いわば manufacture 形態ともいうべきものであった。すなわち，その特徴は，経営は小規模にとどまり，二つのグループにわけられたのである。weaving のみを専門とする者と spinning mill を所有し，domestic weaver に仕事を与えた者とにわけられたのであって，前者は主として大都会に居住していたのにたいし，後者は田舎 (country districts) に住んでいた (pp. 29—34)。問題は労働力がどのように調達され，どこから供給されたかということであり，すでにのべたような著者の問題提起によれば，Redford, Clapham, Ashton および Mantoux や Halévy に批判的であるところから，独自の仮設をうち出してくるのである。

1770 年，産業革命の本格的展開以前の時期には，cotton hand weaver というものは存在しなかったのであって，従ってその労働力は，綿業のもっとも盛んな Lancashire 地方を例にとれば，亜麻と綿との混合製品としてのファスチャン織工が主要な労働力を形成したことは明らかである (p. 41)。しかしこれだけではとても間に合わず，雇主は，労働力を求めて，彼らの希望に応ずるために，無理をして好条件を出す。たとえば，家具つきの家と 4 エーカーの良い土地を 5 ギニーで借りられるというように。このようなよびかけに応じて集まった労働者のうち，もっとも多かったのは農業労働者であり，農業を機織と結びつけていたのであって，多くの農業労働者が農業を見捨てた結果として，farmer は，深刻な労働力不足と賃金の高騰に悩むこととなった。1780 年以後，40 年間にわたって，cotton hand-loom weavers は増加しつづけたのであるが，1810 年から 20 年にかけての異常な増大は，キャラコ織工の増加によると思われる (pp. 47-49)。そして 1826 年頃には，その数は絶頂に達するのであるが，この 20 年代における手織工の正確な人数についての諸家の見解はまちまちである。著者は，紡糸の量を基礎として，weaver の数が決定されるという George Smith の見解を支持しつつ，200,000 人程度であったろうと推測する (p. 55)。

しかしながら，労働力問題において，もっとも興味深いことは，機械と農耕 (weaving and farming) との結びつき，いわゆる「半農半工型」労働であろう。こ

の問題について，著者は，Clapham を拒否して，はっきりと Redford を支持する立場をとる。多くの都市の労働者は，自己の職業の不況の際に，織機の前に座ったのであって，1826 年頃，Blackburn の大きな農村においては，"mason and weaver", "joiner and weaver", "collier and weaver", "shoemaker and weaver"，さらに，"weaver and calicoprinter" という組み合せも稀ではなかったといわれる。だが，こうした事実をそのまま認めるとすると，本来の手織工とは一体何であるのか，「半農半工」，あるいは「半労半工」という形態で手織工が広はんに存在したとした場合，それは何によって，本来の手織工と認めうるかが大きな問題とならざるをえない。ここに手織工の存在形態を明確に把握しえない大きな理由があるのである。この点について理論的説明は，著者の場合，ほとんどなされていないのは遺憾である。ただ，熟練工として，一人前の賃金を得て，cotton weaving を唯一の仕事としていた成人の織工，すなわち，本来の織工がきわめて少く，労働力構造のなかで，婦人および子供が圧倒的な地位をしめたことが大きな意味をもつ。著者は，この家計補助的な労働者としての婦人および児童労働者を重視し，アイルランドの移民労働者を重視する Redford に対して批判的であるが (pp. 64-65)，これについても必ずしも明確でない多くの問題を残しているように思われる。

しかしながら，手織工の問題について，従来の多くの定説にたいして自己の見解を対置し，とくに，労働力および賃金の面で，経済学的な鋭い分析を提示していることは，ユニークな企てというべきであり，イギリス経済史，労働運動史研究者の必読に値しよう。なお，賃金における piece-rate の問題も，労働力の問題とならんで，本書におけるもっとも重要な部分を成すことを付記する。(xiv+pp. 301, ¥4,050)

飯　田　　鼎